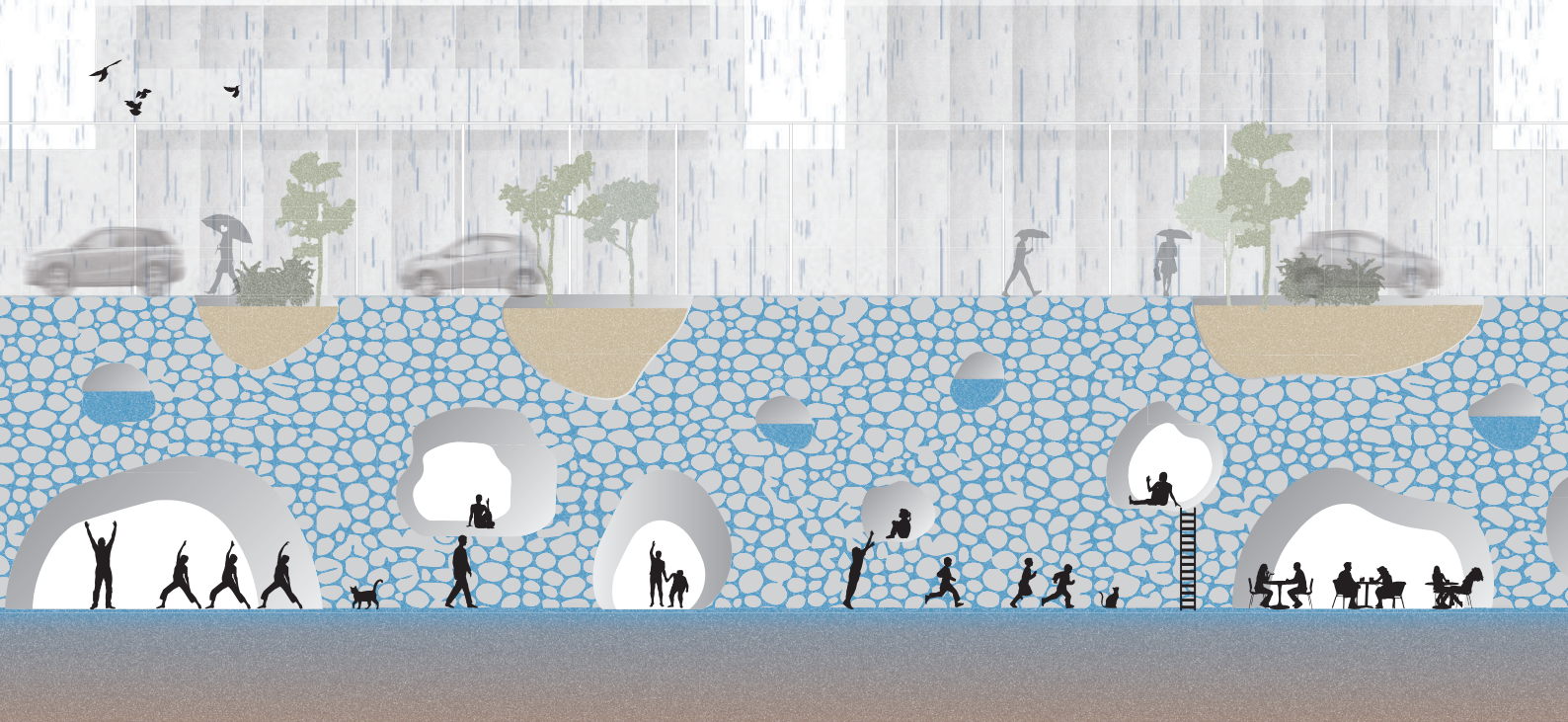
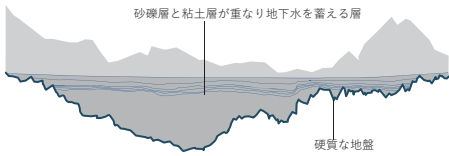


つなぐ浸透帯

京都の地下には、長い年月を経て形成された豊かな水脈が眠る。しかし、都市化により地表と地下の関係は途絶えてしまった。そこで都市の雨水が集まる大通りににおいて地下の水脈との新しい関係を紡ぎ出す。地上から地下へと緩やかに浸透する雨水は、潤いある歩行空間を創出する。この提案は、都市における失われた水の循環を取り戻し、都市に新たな風景を描き出す試みである。



-1 地下水によって発展した京都



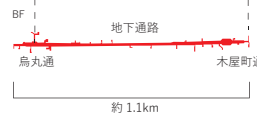
京都の地下には琵琶湖の水量に匹敵する巨大な地下水盆地が眠ると言われる。約 100 万年前から海と陸が入れ替わるなかで、砂礫層と粘土層が幾重に堆積し、豊富な地下水を蓄える土壌を形成した。この地下水は京都の産業と都市の発展を支える重要な水源だった。

-2 都市化による水の循環の断絶



都市化による地表のコンクリート化は水循環を阻害し、京都の各地では井戸枯れを引き起こしている。地下水は都市の共有財産であり、その保全と活用は持続可能な都市づくりの重要課題となっている。

-3 敷地 四条通地下道



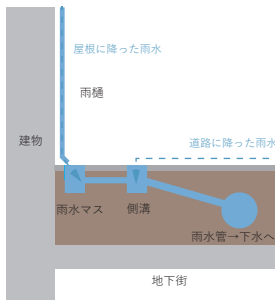
対象敷地である四条通地下道は 1963 年に開通し、烏丸通から木屋町通まで約 1.1km を結ぶ。地上の混雑を避けるための通路だったが、現在は単なる通過空間となり、四条通の真下であるという好立地のポテンシャルは活かされていないのが、現状である。

地上の様子



停車と歩行の機能を維持しながら、都市に水循環をもたらす浸透帯。夏季は貯留水の気化熱により歩行空間を涼やかに保ち、点在する植栽が保水機能を高め、街に緑を育む。

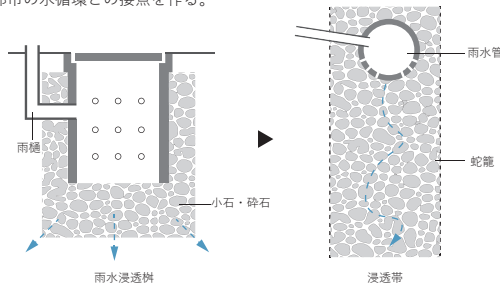
-4 雨水が集中する路面の地下



都市に降った雨水の多くは道路に集中する。ビルの雨水は樋を通して雨水枡へ、道路の雨水は側溝へと流れ込み、これらは下水道へと放出される。当該敷地では、地下街の存在により雨水が地中に浸透できず、地表と地下の自然な水循環が断絶されてしまっている。

-5 雨水浸透の仕組み

そこで地下の水循環を取り戻すため、雨水浸透枡の原理を応用した建築を提案する。この仕組みは、雨水を一時的に貯留して汚物を除去した後、穴から徐々に放出する。周囲に碎石を配置することで、地中への浸透を緩やかにコントロールする。これを発展させ、雨水が集中する道路から地下空間を貫通する浸透帯を設置することで、都市の水循環との接点を作る。

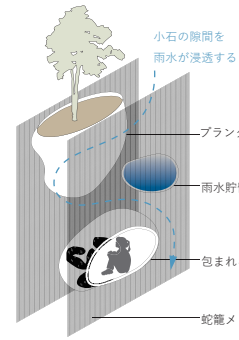


地下の様子



浸透帯に沿って大小の空間が連なり、多様な活動が地下へと広がる。かつての無機質な通路は、人々の賑わいに満ちた豊かな公共空間へと生まれ変わる。

-6 石の中の空間



浸透帯の碎石の隙間に、石の形状をした空間ユニットを設置する。この形状により、蛇籠に敷き詰められた小石と共に雨水を円滑に地下へと誘導する。地上部はプランター、埋め込まれた部分は雨水貯留のタンク、地下で現れる部分は曲面の包まれるような部屋となり、雨水の熱容量により夏は涼しく、冬は温度の安定した快適な環境を作り出す。

-7 都市と大地をつなぐ浸透帯

停車帯として使用される一車線分のスペースに、道路排水機能を備えた浸透帯を設置する。道路に集まる雨水を地中へと緩やかに浸透させることで、都市の水循環を再生する。さらに、貯留水の気化熱により地上部の夏季温度を低減し、快適な憩いの空間として人々が集まる地下空間を創出する新たな都市インフラを実現する。

